



東日本大震災被災地における
第4回ボランティア活動報告
「絆・ベルリン」

報告の第一部

Dr. Frank Brose

絆・ベルリン副会長

2013年5月10日から19日まで、「絆・ベルリン」は四回目のボランティア活動を実施しました。去年の秋と比べると参加者は10人減って16人（8人のドイツ人と8人の日本人）になりました。

一回目と二回目のボランティア活動の旅にも16人が参加しました。この参加者数は仕事に最適だと思います。参加者の数が増大すると、オーガナイズがますます複雑になるからです。13人の中核グループは期間中毎日活動をして、そのほかの3人は二、三日間中核グループに加わりました。

5月8日に、9人の絆・メンバーはベルリンからモスクワを経て東京に飛び、9日に、市川に住んでいる日本人の絆・メンバーの家に一晩泊まりました。

次の日に10人がメンバーの車とレンタカーの二台で大船渡に行きました。ボランティア活動のために借りたので、親切にもレンタカーを3割引きで借してくれました。

被災地の交通インフラ復興の現状を自分の目で見て確かめるために、ほかの3人はJR東日本で東京から大船渡に行きました。

まず、新幹線で一関に行きました。そして、新幹線から大船渡線へ乗り換えて、気仙沼市に行きました。そこから最近開通したBRTバス線区で大船渡の盛（さかり）駅に着きました。東京中央駅から大船渡まで5時間半かかりました。BRTは「bus rapid transit（バス・ラピッド・トランジット）」の略称です（気仙沼～盛の間は45キロぐらいです）。



東日本大震災前に、JR 東日本の大船渡線は一ノ関駅と気仙沼市を經由して大船渡市の盛駅を結んでいました。しかし、沿岸部を走行するこの区間は津波で破壊されたので、大船渡線は気仙沼から大船渡まで不通となっています。

JR 東日本は暫定策として、路盤の崩落を免れた線路敷地の一部をバス専用道に改築しました。交差点のない道路です。しかし、津波で崩落した路盤の一部は復旧のめどがまだ立っていません。今年3月2日より仮復旧として、BRT（バス高速輸送システム）の運行が開始されました。



現在、JR は BRT 線を延長しています。盛駅と大船渡駅が JR の専用道で結ばれます。JR は残り約10キロを、できるだけ早く専用道化させる意向です。完成後、大船渡線と私鉄の三陸鉄道南リアス線への乗り換えが大船渡駅でできるようになります。

大船渡駅と釜石市を結ぶ三陸鉄道南リアス線も大震災発生以来全線が不通になっていましたが、2013年4月3日に線の一部が復旧し、運行を再開しました。



復活した三陸鉄道南リアス線

それ以来、電車は大船渡駅から綾里町（りょうりまち）と越喜来（おきらい）を経て吉浜駅まで行きます。クウェートの支援で気動車を3台購入することができました。

吉浜駅は仮終点です。延長が予定されています。被災地の復興について、今回も本当に交通インフラ復興の進歩が見られました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

今回で4度目に、大船渡市の福祉の里センターに宿泊しました（女性は二つの部屋に、男性は二つの部屋に泊まりました）。そこから大船渡や陸前高田、気仙沼、大槌などに車で行き、ボランティア活動をしました。

5月11日（土曜日）

今日、私たちは陸前高田市・上長部に行きました。そこで木を植えて、獣対策用の新しい電気柵セットを巡視し、ベルリン・ハウスでコンサートを催しました。そして「遠野まごころネット（TMN）」のメンバーと「翼」プロジェクトについての相談をしました。本当にぎっしりつまったプログラムでした。

1）絆の果樹園

去年の秋に、絆・ベルリンは復興の象徴として、上長部公民館の近くの敷地にリンゴの果樹園を造りました。そこに25本の苗木を4列に1メートル半の間隔で植えました。リンゴの種類は「紅玉」で、ドイツ名はヨナタンでした。

残念ながら、厳しい冬の間にはほとんどリンゴの木が霜で枯れてしまいました。それで、今度は、「遠野まごころネット（TMN）」の援助でもう一度試みました。我々は枯れた「紅玉」を抜き、TMNの提案にもとづいてもう一度「紅玉」を植えました。



すでに新芽が出始める時期なので、植樹の方法も適応しました。根を周りの土とよく一体化させるために、水を穴の中に入れて土をドロドロにしました。今度こそ無事に生長してほしいです。



2) 新しい電気柵セット

去年は上長部では鳥獣害のことが大問題です。畑のまわりには単純な電気柵が張り巡らされていますが、鹿やカモシカたちによって柵が押し倒されてしまうことも多く、日々の見回りと補修が欠かせませんでした。獣たちの増加も原因のひとつではありますが、被災地特有の現象です。災害以後は人口が減ったので、動物が大胆になってきたそうです。

それで、絆・ベルリンは去年12月に上長部の人に寄付金で援助を申し出しました。

新しい電気柵のコストは全部で460,000円だったので、今年2月に絆・ベルリンは2000ユーロ（約240,000円）の寄付しました。同額がタイガー株式会社から寄付されました。タイガー株式会社は電気柵のメーカーです。

3月と4月に、上長部の人は遠野まごころネットのメンバーと一緒に新しい電気柵セットを設置しました。環境にやさしくエコな太陽電池式電気柵セット（右の写真）でした。

彼らは電線を500m引いて、支柱を160本打ちました。



こんな具合に、上長部の農場全体をカバーすることができました。地元の方々は「もう鳥獣害の問題は解決された」と言ったので、我々は本当に喜んでいます。



上長部：新しい電気柵に囲まれている畑



赤い線は電気柵です。

被災地の農業復興における課題解決のために、改善の第一歩だと思います。遠野まごころネットによると、上長部のみならず、被災地域における営農復興と鳥獣害被害対策の先駆けとして、他地域や新聞等からの問い合わせが舞い込むようになっていそうです。

3) ベルリン・ハウス

昼に、ベルリンハウスと命名された新しい上長部の公民館で地域のみなさんとの交流会がありました。



ベルリンハウスはドイツの支援で去年建てられました。2011年9月、我々は少しでも復興作業の手伝いをしようと、はじめて三陸海岸を訪れました。その時上長部の人たちが復興の出発点として公民館を再建したいという希望を持っていらっしやることを、NPO・TMNを通して聞きました。

ベルリンに帰り、私たちはこのプロジェクトをベルリン独日協会に紹介しました。幸いにも独日協会のみなさまにもこの持続的なプロジェクトの意義を理解してもらうことができ、10万ユーロの資金援助をいただくことになりました。建築家で絆・メンバーのグッチョウさんが設計をボランティアで引き受けてくれたばかりではなく、企業から約3万ユーロ相当の資材援助も取りまとめてくれました。

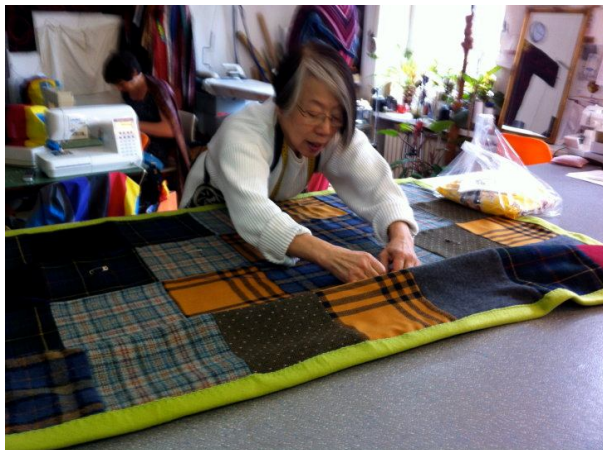
TMNが施行主で、絆ベルリンはこのプロジェクトをコーディネートしてきました。去年4月の鉄入れ式に関係者一同は参加しました。鉄入れをしてからわずか九ヶ月後には完成を祝うことができました。

完成以来、地元の方々がこの建物によく集まって、多彩な活動をしています。コミュニティセンターが第一歩として考えられているように、コミュニティーの再活性化だと思います。

今日は、津波の惨害の2年後に、同じところで、歌ったり笑ったりして、一緒に楽しい時間を過ごせたことはとてもうれしいことでした。



村長が挨拶しました。福沢先生と私の短いスピーチの後で、一緒に美味しいご飯を食べました。上長部のお母様が私たちに美味しい食事を用意してくださいました。昼食後、上長部のお母さんに「友の会」から手作りの暖かい毛布を差し上げました。



友の会の山下さんが手縫いした毛布を上長部のお母さんに手渡しました

（「友の会」はベルリンに住んで日本女性のグループです。「絆・ベルリン」に繋がるグループですが、自主的に活動し、必要な場合には協力し合います）。午後1時に、演奏会が始まりました。ピアニストの方が伴奏し、フラウケ・トゥヴォルクさんが歌い、クラウス・シュナレンベルガーさんがフルートを吹きました。日本人の絆・メンバーの石井清秀さんがハーモニカを吹きました。彼らはバッハや

ドニゼッティ、ブラームス、シューベルト、そしてドイツと日本の民謡も演奏しました。



演奏が1時間半以上続きました。終わりに、「故郷」をフラウケさんのリードのもと全員で合唱しました。



クラウド・シュナレンベルガーは最初から絆・ベルリンのメンバーで、長年趣味でフルートを吹いて、チェロを弾いています。市川に住んでいる絆・メンバーの石井清秀さんも長年趣味でクロマチック・ハーモニカを吹いています。

トゥヴォルク・フラウケさんは元オペラ歌手です。34年間、ベルリン・ドイツ・オペラ合唱団員でした。そして、2004年からベルリン独日協会混声合唱団のメンバーです。

ベルリン・ドイツ・オペラ合唱団員としてフラウケさんは4度日本へもいらっしゃいました。その日本訪問で日本の風土と日本人の人柄に触れ、彼女は日本語を勉強することを決意し、もう何年も前から、週に一度、私と一緒に日本語の個人授業を受けています。

第3回ボランティア活動の後で、私は彼女に次の絆・旅行に参加しないかと尋ねたところ、快く承知し、演奏会プログラムについていろいろ考えてくれました。

演奏の準備では、シュナレンベルガーさんと一緒に演奏会プログラムを作成してくれました。

そして、46ページの挿し絵も入った本「ドイツ・日本 歌の葉」を編集してくれました。

ベルリンでは150冊の「歌の葉」を作りました。東北では、すべての演奏したコンサートの後に、友情の印として配りました。

必要なピアノ伴奏者は、福沢先生がいろいろと日本に電話を掛け、メールをたくさんやりとりし、見つけることができました。



NPO「被災地にピアノをとどける会（www.piano-donation.org）」はベルリン・ハウスにピアノを寄付しました。

音楽を愛していた人たちの笑顔が、再び音楽によってよみがえるよう、2011年6月に音楽家のイニシアティブで立てられたNPOは義援金とピアノの寄贈を取りまとめ、被災した学校や育児室、公民館などへピアノを届けています。

ピアノを弾く伴奏者を見つけることは本当に難しかったです。どうやらドイツのプロが来るというので、不安の念をを起こさせていたそうでした。しかし、大船渡に住んでいる支援者の今野みつこさんを介して、ピアニストの佐藤さんと高木さんが伴奏をしてくれました。



本当に素晴らしいコンサートでした。聴衆が盛んな拍手を送りました。皆さんはコンサートを楽しんで、新しい公民館の幸福な雰囲気には浸っていました。コンサートの後で、TMNの及川さんと臼澤さん、日向さんと一緒に「翼」プロジェクトについての相談をしました。セレクションの方法について話し合いました。

5月12日（日曜日）

午前に、大船渡市社協復興ボランティアセンターに行きました。ボランティアセンターはいぜんとして同じ場所にありますが、大船渡では復興が進んでいるので、ボランティア人の人数は再び減少しています。今日、参加者は地元の方4名と我々12人だけでした。

センターで楽しい再会がありました。最上さんと金太郎さんに再会できて本当にうれしかったです。最上さんは今まで2年間以上ボランティアをしています。金太郎と呼ばれた力強い若者もよくボランティアをしてくれています。彼はもうすぐ新しい仕事を始めるそうです。力持ちなので、金太郎は本当にぴったりのニック・ネームです。ボランティアの人たちはみんな二台のマイクロバスで10キロぐらい離れた三陸町越喜来に行き、泥が詰まった側溝の掃除をしました。

今回が4度目で、半年をおいて越喜来で同じ作業をしました。金太郎さんと一緒に2回目にボランティアをしました。さらに、最上さんのリーダーシップで働くのは3回目、とてもお世話になりました。

我々はこの地域の未来を築くためのボランティア支援作業を続けて共に行うことにより、「日独友情の絆」がさらに強固なものになってきていることを深く感じ取っています。



側溝の中は水が泥濘の上を流れていたもので、仕事が本当に大変でしたが、午前中で20メートル以上側溝をきれいにすることができました。

越喜来は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けました。越喜来湾の堤防は11・5メートルでした。その堤防高は、100年に1度程度の津波の想定に基づいて作られていました。しかし、東日本大震災の津波の高さは17・9メートルだったので、町を破壊しました。海岸から約2キロ内陸まで津波は押し寄せました。

その2年後の今、良い方向に状況が変わって来ています。すでに行われた作業が甚大なので、私たちは本当に深い感銘を受けました。



越喜来：図の赤い部分＝津波氾濫地

2011の秋は、どちらを向いても、たくさんの瓦礫が山のように積み重ねられていました。津波の破壊力の恐ろしさを感じました。コンクリートも粉砕されていました。罹災地はゴミためのように見えました。2012の春には多くの瓦礫が除去されていました。前回まで見られた破壊された小学校や郵便局の建物は撤去されていましたが、同様に破壊された公民館は今でも撤去されていません。しかし、大抵の所では 廃墟とがれきの山が除去されていました。



現在、津波被災地では造営地の土地を高くするために、海の近くに砂が約5メートル積み上げられています。そして、護岸のために、越喜来ではテトラポッドを沢山作っています。大きなテトラポッド置場が見えました。

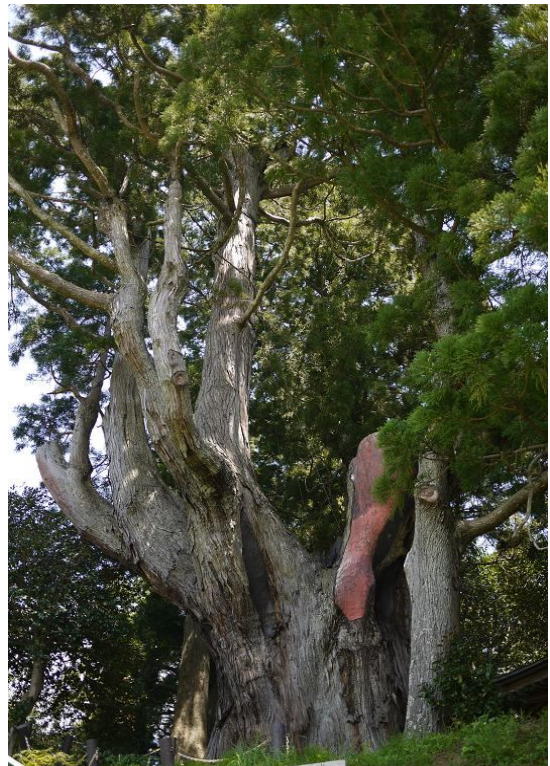


撤去された小学校の前にある児童公園が記念の場所とボランティア人のための雨宿りの小屋に改造されました。そこで昼休みしました。



周りの牧草地で草を食べている羊を初めてみました。期待が生まれました。コミュニティの復活が少しずつ、しかし、確実にと進んでいると思います。

昼休み後、最上さんは私たちに特別な木に案内してくれました。越喜来にそびえる「三陸大王杉」という大杉です。海からいくらかも離れていない場所ですが、少し高台にあったおかげで津波の被害を免れました。入口のところから少し坂を上り、続いて階段を上がって行くと鳥居があり、八幡神社の社殿が見えてきます。社殿のまわりには何本かの杉の巨木が立っていました。ひときわ目を惹くのは、社殿のななめ後ろに位置するこの大杉。八幡神社のご神木として崇められている「三陸大王杉」です。樹高は23m、幹周りは14mです。樹齢は、推定7000年以上といわれています。



我々は圧倒されて、どっしりとした重厚な存在感に、何か特別なものを感じてしまいます。

最上さんは「脱力感を覚えるとき、その坂に登っていきます。いつまでも力強い姿を両腕で抱くと、みなぎるパワーを感じ取れています。」と言いました。まさに「守り神」といった感じですね。地元の方々の「心のよりどころ」にもなっているこの大杉だと思います。

6月12日（月曜日）

去年の10月に、私はTMNに予定の植樹運動について尋ねました。前回のお別れの日に、臼澤さんは私に「絆森」と言う再植林プロジェクトのペーパーを渡し、支援を要請しました。

モットーは「ドイツの黒い森から日本の白い森へ」です。その表現はドイツの黒い森及び日本の「ドロノキ」の白い木材とつながりがあります。

「ドロノキ」から造っている「カンナガラ」は日本の伝統芸能に必要ですが、被災地ではドロノキが年々減少しています。



大変なプロジェクトなので、絆・ベルリンはドイツからの支持についての可能性を探すことを約束しました。

今年3月11日に、私はベルリンにあった「東日本大震災復興祈念の集い」の枠内で「絆森プロジェクト」をドイツ人の前で呈出しました。

そして、絆森プロジェクトの現場を視察し、「臼澤鹿子踊保存会」の人たちに会いたいという気持ちから、臼澤さんと連絡をとってきました。



「不撓不屈」 - 東梅さんはこのモットーに基づいて行動しています。

今日、我々は2台の車で大船渡から50キロ離れた大槌町へ行きました。

まず、臼澤伝承館では「臼澤鹿子踊保存会（UKK）」の会長の東梅英夫（とうばいてるお）さんが我々にカンナガラについて、詳しく説明してくれました。

東梅さんは絆森プロジェクトの責任者です。UKKとTMNが協同で行っています。

さらに、構成する「大槌絆森協議会」を通して一般社団法人を設立し、植林後の管理運営にあたる計画です。

UKKの本旨は地域の鹿子舞を保存します。30のコミュニティーからの約150人のメンバーがいます。鹿子踊りについて、岩手県では舞踊団体が145団体あり、大槌町では5団体が団結しています。今から13年前に、素晴らしい伝承館を個人的なお金で建てています。

津波の時には、建物は避難所に使われました。

3月11日に150人が避難していました。

我々は鹿子踊りの仮面とドロの木の木材、「カナガラ」を見せてもらいました。ドロの木はポプラの木の種類です。木材は真っ白でやわらかいです。



鹿子踊は、ドロの木を削ったカナガラを使います。まっすぐ伸びている木の幹を切って、縦220*横30*高さ30センチの板を作ります。そして、厚さ0.2ミリ、長さ220センチのカナガラを板から鉋で削ります。一頭の鹿子頭につける数は約300枚です。一本の木で一団体が一年間使える量しか取れません（1年でカナガラはだんだん黄葉してしまいます）。近年、このドロの木は自然林を探索しながら、かろうじて確保しているのが現状だそうです。ドロの木は本当に絶滅寸前だそうです。



このドロの木もほかの広葉樹の種類も大槌町の後背地に植林し、次世代に続く郷土芸能の安定的存続を目指すのがこのプロジェクトの目的です。郷土芸能は、人間と人間、自然、地域とのつながりの中で存在するので、まさに、復興の要素の一つだと思います。被災した人々にとっては、郷土芸能は大切な頼みの綱です。

丁寧な説明の後で、舞踊団（2人のダンサー、2人の鼓手）は伝承館の前で鹿子舞を演じてくれました。



ちなみに、「カンナガラ」の言葉については、二つの意味があります。散文的な意味は「鉋（かんな）柄（がら）」です。宗教的な意味は「随神; 惟神」です（「かん」は神、「から」は、「素性・性質」という意味です。「な」は「の」と同じ格助詞です。）日本人は古来、仮面の白い頭髪が外界と触れあう“心のアンテナ”と考えてきました。

1994年4月からUKKでは、ドロノキの種を採取して苗木を育てたほか、接ぎ木や挿し木を試みましたが、途中で枯れてしまい上手くいきませんでした。このため、2011年3月11日の震災を契機に、津波に遭った大槌で本格的にドロノキを植林し、長期的に安定した「カンナガラ」を造るため、UKKとTMNが連携して2012年4月にプロジェクトをスタートさせました。ドロノキを他の地域から購入するのではなく、種の保存のために地元のドロノキから種を採取し苗から育てています。

8000平方メートルの植林対象エリアは大槌町役場から借りている新山高原です。そこに一万本の苗木を植える予定です。将来的には面積を増やし、ドロノキを2万本植林する計画です。見積もり原価は全部で年に7万～8万ユーロです。国際的な支持を期待しています。たとえば、UNなどとコンタクトをとっています。収穫できるまでに成長期間が50年なので、長期計画ですが、未来の財源になると思っています。希望の種です。

しかし、一つのエリアに植林すると病気等の影響を受けるため分散する必要があることから、現在、適地を数か所探しています。なお、苗木を植えても、10年間程は年数回の下草の切り取りなどのほか、枝木の剪定、間引きなどの管理が必要となります。

絆・ベルリンはドイツからの支持の可能性について検討することを約束しました。一つの可能性としては、スポンサーを集めます。ほかの可能性としては「木の里親」を募集することです。たとえば、いわゆる“養父母”が植林地の一部（～X平方メートル）の費用を負担するなど、現在、検討中です。

第二の要点は生態系の回復です。

山口 幸夫さん（現職：日本社会事業大学 社会事業研究所 特任准教授）によると、この地域は生態学的にもはや健全ではないそうです。プロジェクトの波及効果として、森林保全、生態環境再生、水源の涵養に寄与するといったことも期待されています。プロジェクト対象地域の新山高原は鬱蒼と生い茂った緑豊かな森でしたが、1970年代から北上山系開発の名の下に森を伐採し、牛の放牧が行われました。ケンタッキーブルーグラスがたくさん植えられました。その結果、保水力が減少し、周辺の間湿原の範囲も年々狭くなっている状況にあります。ひどい雨の後で、小川が奔流し、大地を浸食しています。また別の所では、水源が枯渇しています。このため、広葉樹林を植林することにより森林の公益的機能が高まることも多いに期待されております。

第三の要点は経済開発です。

住宅も仕事場も60パーセント以上は被害を受けたので、大勢の人がまだ就職活動をしています。若者が東京などへたくさん移住し、今までに、大槌町の人口は15000人から6000人に減少しました。新しい職場が本当に必要です。

「絆森」はもっと大きな基本計画の中心部です。基本計画は収益事業と観光事業のプロジェクトも含んでいます。観光事業の復興ために、ハイキングコース、自然歩道、公園、果樹園、山小屋などを作る予定です。



そして、遠野から大槌町まで、山を海で結ぶ“物語の街道”を建設することが計画されています。山と海岸に基づいた遠野物語に関連しています。

収益事業として、「絆森」エコ・ビジネスを立ち上げることが予定されています。新しい森の関連商品は木工品、梱包材、薪、キャラクターグッズなどです。そして、「ドロの木」の副産物はクリスマスのデコレーションやつまようじ、護符などです。



午後は車で山に向かい、海拔800メートルの高さにある植林対象エリアを見学しました。4年ほど成長した苗木が植えられていました。所々に10年近い若木も見られました。

伝承館へ帰ると、「遠野まごころネット」がみなさんに美味しい弁当を配ってくれました。



昼ご飯後、「まごころ農園（まごころの郷1+2）」を見に行きました。その2つの場所では、農家が近くにある仮設住宅に住んでいる人々と一緒に薬草園と菜園を経営しています。まごころの郷2では特別な「安渡産大槌復興米」があります。

本当に小さく庭のような田で、大槌町の被災した地区で瓦礫の間からそっと芽を出していたほんの3株の稲です。

最後に、新しく提案されたコミュニティ・センターの建設地に案内されました。新しい公民館のために、ボッシュ財団が早くも200.000ユーロを可決しました。その建物は大きな建設計画の一部です。「一つ屋根の下」の名で、集会場兼木工工房などが建てられます。

「絆・ベルリン」はあの上長部と同じようにこのプロジェクトを仲介しています。施行主の「遠野まごころネット」とドイツの財団との間に立って、仲介の労を執ったのが「絆・ベルリン」であります。

大槌町の吉里吉里にコミュニティーセンターが建設される計画でしたが、公営の下水道が敷かれないことになり、違う敷地になると「遠野まごころネット」から連絡がありました。しかし、新しい設計図を見せてもらうと、建物の目的が公民館から障害者用適合工房に変わっていました。ボッシュ財団が了承するには相当の説得が必要だと思います。

別紙第二部参照